

キリノの毒にしびれてみない？

図書館係 阿部健治

桐野夏生（きりの・なつお。ちなみに女性作家ですよ）が好きだ。

筆者は、嫉妬とか恨みとか、人の「悪感情」という奴が嫌いで、そんなものに囚われるのは愚の骨頂だと思っている。世の中には、楽しいことや人を感動させることがたくさんあるのだから、それを味わって暮らした方がよいではないか。筆者がこう思うようになったのには、中学生の時に読んだ、菊池寛の『俊寛』という小説の影響が大きい。俊寛は平安末期（1177）、平氏打倒を企てたが（「鹿ヶ谷の陰謀」）失敗し、藤原成経、平康頼と共に鬼界ヶ島に流された人物である。その翌年、平清盛は高倉帝中宮となった娘徳子の安産祈願のための恩赦を行い、その際に成経と康頼の二人は赦されたが、俊寛は島に一人とり残された。彼は絶望してこの仕打ちに深い恨みを抱く。さらにその翌年（1179）、俊寛の侍童だった有王が島を訪れ、変わり果てた主人と再会するが、有王から娘の手紙を受け取った俊寛は死を決意して、食を断ち自害する。結局、俊寛の遺灰だけが京へ戻った、と『平家物語』は語る。

菊池寛はこの話の後半部分を脚色し、一人残されて絶望した俊寛が、目の前に現れた島の娘の健康な肢体に触発され、恨みや都の生活を振り捨てて彼女と結婚するという物語に仕立てた。俊寛は有王がいくら勧めても都に戻ることを拒否する。有王は一人空しく帰京するのである。

菊池の『俊寛』は当時かなり評判になったらしく、盟友の芥川龍之介も菊池に對抗して同じ題名の小説を書いている。これも読んだが、なんか概念的にこねくりまわしている感じで、菊池の『俊寛』の方が「人間の真実」に近いと思った。以来、これが筆者の人生観の核となったのである。

筆者が原田マハや三浦しをんを愛好するのは、彼女たちの主人公が常に「前向き」だからである。そんなわけで、「イヤミス」の女王などとも言われる湊かなえなどには興味がないわけではないのだけれども、どうも触手が動かない。

そんな筆者が「毒のない小説なんて、読んだって仕方ないじゃない（『はじめての文学 桐野夏生』の著者による後書きより）」と高らかに言う桐野夏生が好きだ（今まで読んだ本のベスト1に挙げるくらいに）というのはつじつまが合わないと思われるだろう。実際、自分自身でも変だな、どうしてだろうと思いつつながらこれを書いているのである。

一つには、作家・作品が好きというのは理屈ではない側面があるということだろう。本当に稀だが、本を読んで、体中に戦慄が走ったり（この感覚、いちばんよく覚えているのは漫画家山岸涼子の名作『テレプシコーラ』を読んでいた時のこと。そう言えば、山岸ほどスピリチュアルな漫画家は珍しく、本来は嫌いなタイプに属するはずなのに、筆者の漫画家ベスト1は山岸。本当にわからない）、体の奥深くがカッと熱くなったりする（桐野を読む時はどちらかというとこっち）ことがある。読書の醍醐味とはまさにこれだと思っている。

しかし、これだけでは申し訳ないから、もう少し分析を試みよう。筆者が桐野夏生を好きなのは何より彼女が**潔い**からだと思う。桐野は「優れた小説には、いいことばかりは書いてありません。人間の弱さや狡さ、愚かさ、利己的な面が、きちんと書かれているはずです。」と言う。彼女の作品には、どれにも、人が隠そうとする毒を白日の下に引きずり出して、みんなに見せてやる、これでどうだ、という気概が感じられる。その際、桐野はもちろん権力の悪も暴こうとするが、抑圧される側の悪も遠慮なく描き出す。その様がいかに痛快なのである。

桐野の作品を語る上では『OUT』（1997）という作品に触れないわけにはいかない。この作品は日本人作家の手によるものとして初めてエドガー賞（米ミステリ作家クラブ賞）の最終候補にノミネートされた（2004）。受賞は逸したけれども、英訳されて海外でも広く読まれなければ（これが日本人作家の大きな壁になっていた）ノミネートされないのだからこれは快挙であった。その後、東野圭吾の『容疑者Xの献身』（2012）、湊かなえの『贖罪（しょくざい）』（2018）と日本人作家のノミネートは続いている。また、横山秀夫の『64』もダガー賞（英国推理作家協会）の最終候補5作に残った（2016）。日本人のミステリも世界レベルになったわけだが、桐野の『OUT』はその先駆けになったのである。

また、『OUT』は朝日新聞が識者120人にアンケートした「平成の30冊」（あらゆるジャンルの書物対象）で、宮部みゆき『火車』（1992）と並んで4位に入っている。ちなみにこのアンケートの1位は村上春樹の『1Q84』（2009）、2位はノーベル賞を受けた日系英国人作家カズオ・イシグロの『わたしを離さないで』（2006）、3位は町田康の『告白』（2005）であった。他にめぼしいものを拾うと8位に小川洋子の『博士の愛した数式』（2003）が、11位に村田沙耶香の『コンビニ人間』（2016）が入っている。

ネタバレは避けたいので、本当に簡潔に言うが、『OUT』は「社会の片隅に追いやられた主婦たちが、深夜の弁当工場で出会って連帯・覚醒し、社会に復讐する」という話である。この「深夜の弁当工場」というのが実に秀逸。1990年代の社会的状況をこれ以上なく雄弁に語っている。この時の桐野はまだ売れっ子作家というほどではなく、作家生命を賭けて一人で必死に取材したらしい。そのエネルギーは行間からほとばしっているが、ハードボイルドを愛するアメリカ人たちはそこに動かされたのではあるまいか。

そんな桐野が震災直後から4年がかりで完成させた大作が『バラカ』だ。福島第一原発の4号機までが全て爆発し、東京を含む東日本全域が放射能に汚染されたという設定だ。首都は大阪に移され、社会の上層部の人々は皆、西日本に移ってしまったが、東日本には、ゴースト化した町もあるものの、かなりな数の人間（西に移る経済的ゆとりがなかった人）が生き残り、苦しみながら毎日を送っている。そういう人たちを描いているのである。この小説も「4号機までが全て爆発」という設定が秀逸だ。東京人も栃木県に住む私たちも何事もなかったように暮らしているが、実は「4号機まで全て爆発」というのはかなりの確率で有り得る話だった。本当にぎりぎりの所でそうならなかった。

この小説は、その時どうなるかというシミュレーション小説である。桐野の想像力のリアルさはすごい勢いで読む者に迫ってくる。いや、実に恐ろしい。

そうした桐野夏生の力の一端を知ることができるのが『はじめての文学 桐野夏生』だ。この本の謳い文句は「**キリノの毒にしびれてみる**。」である。はじめての読者向けでも桐野夏生は決して容赦せず、凄まじい毒を吹きかけてくる。けれど面白さの方は保証しよう。味わって見なければ何事もわからない。覚悟を決め、敢然と桐野に挑む勇者の出現を待ちたい。